“The Dull Peoples and The Dynasts” ― *The Dynasts* における個人、国家、「内在意思」

土　屋　結　城

Thomas Hardyの晩年の作*The Dynasts*は、ハーディが長い間抱いていたナポレオン戦争への関心が結実された戯曲、ハーディの言葉によれば“Epic-Drama”であり、その特徴として、ナポレオンを始めとするさまざまな人物たちが登場する現実世界だけでなく、Overworldという架空の世界を設定し、Immanent WillやSpiritといった超現実の存在を登場させていることが挙げられる。すなわち、この作品はナポレオン戦争の客観的記述を目指したものではなく、あくまでもハーディの視点からのナポレオン戦争の記述である。ナポレオン戦争においてはLinda Colleyの研究やGeorg Lukácsの指摘にあるように “It was the French Revolution, the revolutionary wars and the rise and fall of Napoleon, which for the first time made history a mass *experience*, and moreover on a European scale.”（Lukács 23）であり、“the war inevitably destroyed the former separation of army from people.”（Lukács 24）であった。

ハーディは*The Dynasts*執筆の約30年前に、やはりナポレオン戦争を背景とする小説*The Trumpet Major*を上梓しているが、この作品の中でヒロインAnne Garlandが国王一家の来訪を見て、以下のように考える場面がある。“Anne now felt herself close to and looking into the stream of recorded history, within whose banks the littlest things are great, and outside which she and the general bulk of the human race were content to live on as an unreckoned, unheeded superfluity.”（128）ここで、アンは“recorded history”と“unreckoned, unheeded superfluity”の二項対立を提示している。この二者の区別は、Spirit Ironicが最後の場面で述べる以下の言葉からも明らかなように、*The Dynasts*においても厳然と存在する。

Yea, the dull peoples and the Dynasts both,
Those counter-castes not oft adjustable,
Interest antagonistic, proud and poor,
Have fro the nonce been bonded by a wish
To overthrow thee. (3.7.9)

*The Dynasts*におけるこの二者の並列に注目している批評家は多い。例えば作品の冒頭近くでWessexの農民が次のように述べる場面がある。“And you've come to see the sight, like the King and myself? . . . And what a time we do live in, between wars and wassailings, the goblin o' Boney, and King George in flesh and blood!”（1.2.4）このセリフを受けてHarold Orelは以下のように述べている。“It is a world of kings and rustics, of loyal soldiers and cowardly deserters, of disinterested statesmen and ambitious politicians, of high tragedy and opera bouffle. It is, in several important respects, as complex, as darkly rendered, as impossible to understand, as life itself.”（62）さらにG. Glen Wickensは、この議論をバフチンのカーニバル論と結びつけ、この作品のカーニバル的な面を綿密に論じている。彼らの議論にあるように、本作における“dull peoples”と“the Dynasts”、あるいは“the King”と“myself”の並置が“life itself”の表れであること、あるいはそれがカーニバル的であるとの分析は妥当であろうが、こういった並置から読み取れるのはそれだけだろうか。

ナショナリズムの議論においては、Benedict Andersonが述べるところの“primordial villages of face-to-face contact”（Anderson 6）の範囲にある共同体とネイションとの関係が議論の的の一つとなってきた。ナショナリズムの起源をこのような「直接の対面可能性の範囲にある共同体」に求める論者もいれば、ネイションという存在がそのような起源を逆規定していると論じる者もいる。この議論から導き出される結論の一つに以下の命題があろう。すなわち、ナショナリズムの議論においては、直接の対面可能性の範囲にある共同体と、その範囲を超える、想像力を必要とする共同体つまりネイションが存在することが前提とされ、その二者の間には何らかの飛躍、ときには葛藤や矛盾が存在するということである。

では、「直接の対面可能性の範囲にある共同体」を守ろうとする意識と国家を守る意識が実際に反する場合にはどのようなことが起きるだろうか。例えばハーディがナポレオン戦争に題材を得た詩“The Alarm”においては、ナポレ

オン上陸の知らせで海岸に向かおうとする男性が、家に残してきた妻のことを思い、海岸に向かうべきか家に戻るべきか悩む。そして、彼はこのジレンマの解決を鳥に託す。"'O Lord, direct me! . . . / Doth Duty now expect me / To march a-coast, or guard my weak ones near? / Give this bird a flight according, that I thence learn to elect me / The southward of the rear."（*Poems* 38）この場面は、*The Dynasts*でSpiritたちが鳥に姿を変える場面があることを考えると興味深い。彼のジレンマ、つまり「直接の対面可能性の範囲にある共同体」と国家への帰属意識の葛藤（"to march a-coast, or guard my weak ones near"）の解決は、彼自身ではなく、どこからともなく来た鳥が与えるのである。一方ナポレオン戦争を取り上げた*The Trumpet Major*では、愛するアンをOvercombeに残し、兵になることを志願するRobert Lovedayの心情が描かれることはない。彼の愛国心の発露がやや唐突である印象は否めず、先述の葛藤の解決が十分に納得できる形で読者に提示されているとは言いがたい。先に挙げた二者の並置について考える上で、*The Dynasts*ではこの葛藤がどのように描かれているのかを検討したい。

*The Dynasts*が*The Trumpet Major*と大きく異なる点の一つに戦場の描写が挙げられる。*The Trumpet Major*では、アンが去っていく船を岸から望遠鏡で見る場面に顕著であるように、戦場は小説の背後に追いやられ、遠景として距離を置いて見るものであり、アンや読者は新聞や誰かの話を通じて間接的に戦争の情報を手に入れるしかない。しかし*The Dynasts*では祖国を離れ、戦場にいる兵士たちの様子が描写される。彼らは戦場に出ることにより、イングランドへの愛国心を募らせる。彼らが抱く「愛国心」は、自らが生まれ育った土地への愛着であって排他的な共同体意識や何らかの「想像された共同体」を想起しているわけではないという点に注目すると、その意識はnationalismというよりはpatriotismと呼ぶ方が適当であろう。nationalismとpatriotismの違いについてはさまざまな議論があるが、前者が想像された共同体であるネイションへの帰属意識、後者が生まれ育った土地への愛着といった定義がなされることが多いようである。そして論者によってはnationalismに排他性を見出すものもいる。[1] この定義に即せば、この作品の兵士たちが抱く愛国心はpatriotismであるように見える。例えばSecond Deserterと呼ばれる脱走兵が以下のように述べる場面がある。

> but what I say is, without fear of contradiction, I wish to the Lord I was back in old Bristol again. I'd sooner have a nipperkin of our own real 'Bristol milk' than a mash-tub full of this barbarian wine! (2.3.1)
>
> I don't know what he thinks, but I know what I feel! Would that I were at home in England again, where there's old-fashioned tipple, and a proper God A'mighty instead of this eternal 'Ooman and baby: ay, at home a-leaning against old Bristol Bridge, and no questions asked, and the winter sun slanting friendly over Baldwin Street as 'a used to do! . . . (2.3.1)

この逃亡兵の"this barbarian wine!"や、"instead of this eternal 'Ooman and baby"といった表現からは彼がフランス滞在に倦み始めていることが窺われるが、この兵の場合フランスへの敵対心を募らせているというよりは、この滞在を契機に故郷であるブリストルへの愛着を一層強めているだけだとも思われる。

あるいはSergeant Youngと呼ばれる人物の以下のようなセリフもある。"I wonder, I wonder how Stourcastle is looking this summer night, and all the old folks there!"（3.2.1）ここで彼らが形成しているのは排他的なnationalismと言うよりは、上述したように、自らが生まれ育った土地への愛着すなわちpatriotismである。

Second Deserterという役名が示すようなまさに名もなき人々のみならず、歴史に名を残している実在の人物たちも作中で故郷を思う気持ちを吐露する。[2] Nelson提督の旗艦船に乗っていたHardyはネルソンの死の床にて以下のように述べる。

> Thoughts all confused, my lord: — their needs on deck,
> Your own sad state, and your unrivalled past;
> Mixed up with flashes of old things afar –
> Old childish things at home, down Wessex way,
> In the snug village under Blackdon Hill
> Where I was born. The tumbling stream, the garden,
> The placid look of the grey dial there,
> Marking unconsciously this bloody hour,

And the red apples on my father’s trees,
Just now full ripe. (1.5.4)

ハーディのこの心情は、特にウェセックスの自然への思いを吐露している点で、脱走兵やヤング軍曹と共通するものがある。

彼のこの心情にはネルソンも共感する。“Ay, thus do little things / Steal into my mind, too.”（1.5.4）さらに彼は続けて家族への思いをハーディに打ち明ける。しかし、ネルソンはそのような望郷の念や家族への思いを国家への忠誠心により抑えこむ。作中、ネルソンはイングランドのために戦っているということが幾度か描かれる。彼が乗っている船には“England expects every man to do his duty.”の一文が掲げられており、また他にも“’Twas not worth while! – He was, no doubt, a man / Who in simplicity and sheer good faith / Strove but to serve his country.”（1.5.4）、“how goes the day with us and England?”（1.5.4）のように、イングランドへの忠誠心が見て取れるセリフがある。懸念している家族については遺言書を作ったため、“Now she rests / Safe on the nation’s honour”（1.5.4）と国家にその身を託すことができ安心する。そして、最期に“I’m satisfied. Thank God, I have done my duty!”（1.5.4）と呟いて死ぬ。つまり、ネルソンにおいては「直接の対面可能性の範囲にある共同体」の一員である家族への関心より国家への忠誠心が上位に位置づけられており、そのため家族を国家にゆだねることにためらいはなく、彼個人の心配は国家へと回収される。詩では鳥の存在によって解決されたジレンマだが、ここではそのような外部からの導きはない。ネルソン自身がそのジレンマを、国家への忠誠心の優先という形で解決するのである。

一方、戦場に近いところにいながらそのようなジレンマを抱かない存在としてウェセックスの農民が描かれる。本作品に登場するウェセックスの人々は、ナポレオンがイギリスに侵略してきた場合の上陸地点になると思われた場所にいたゆえに、国家の危機よりも自身の存在への危機をより強く感じている。冒頭のウェセックスの場面で Second Passengerが “on a spot where we may, in less than three months, be fighting for our very existence?”（1.1.1）と述べるところからもわかるように、彼らは彼らの存在ならびに土地を脅かす敵と戦う瀬戸際に立たされている。彼らにとっては、ナポレオンの脅威とはすなわち、自らの存在ならびに共同体存続への脅威である。国家への帰属意

識ゆえにナポレオンを敵視しているわけではない。*The Dynasts*に先行する作品*The Trumpet Major*と近い年に書かれた*The Return of the Native*では、ナポレオンと紅殻売りのreddlemanが入れ替え可能な存在として語られる場面がある。“ ‘The reddleman is coming for you!’ had been the formulated threat of Wessex mothers for many generations. He was successfully supplanted for a while, at the beginning of the present century, by Buonaparte; but as process of time rendered the latter personage stale and ineffective the older phrase resumed its early prominence.”（79）ナポレオンは国家の敵、reddleman は共同体への脅威の象徴である。その両者が交換可能な存在として認識されている限りにおいて、この土地の者たちにとってはどちらも共同体を脅かす者であるという点で同等の存在なのである。

このようなウェセックスの人々がより大きな共同体、すなわち国家の存在を意識するのは、国家という概念を可視化、具現化した存在である国王を見るときである。ウェセックスの First Spectator と呼ばれる人物が “Now come the Light Dragoons; what a time they take to get all past! See, the King turns to speak to one of his notables. Well, well! this day will be recorded in history.”（1.2.4）と述べるとき、彼らは “recorded history” を意識し、それに近づくことを希求する。逆もまた然りで、ナポレオンの姿にフランスを見る者もいる。プロイセンでは Second Citizen が “This France, or rather say, indeed, this man – ”（2.1.3）と述べる。このように、ナポレオン上陸の危機に直面していたウェセックスの者たちは、その存在を脅かされていたゆえにナポレオンへの敵対心を募らせるが、それが国家と結びつくには国王という媒介が必要であった。

しかし、自らの存在の危機にさらされない、すなわち戦場から遠く離れたところにいる者たちには、国家を想像するのは困難であるようだ。例えばトラファルガー海戦の勝利を祝うパレードの最中、ある子供が、実感が伴わない遠くの敵との戦争よりも彼にとって身近な存在の方が大事であると思っていることが伺える発言をする。BOY. “Uncle John was carried on board a man-of-war to fight under Nelson; and nobody minded Uncle John’s parrot, and it talked itself to death. So Mr. Pitt killed Uncle John’s parrot; see it, sir?”（1.5.5）

それに対して、戦場から遠く離れていても歴史に名を残す、いわば偉人たちは国家という共同体を想像している。例えば Whitbread が “Our bold and reckless enemy”（1.1.3）と言うとき、あるいは Fox が “to raise men

for the common weal, / It sets a harmful and unequal tax / Capriciously on our communities.”（1.1.3）と熱弁を振るうとき、あるいはA Cabinet Minister が “our greening land”（1.1.5）と呼ぶとき、そこには国家が想像されているのではないだろうか。特に象徴的なのはPittが今わの際に発する “My country! How I leave my country!”（1.6.8）というセリフである。そして、この文脈に鑑みると以下のPrince Regentのセリフもその滑稽さがより露になる。“Oh, damn the peace, and damn the war, and damn Boney, and damn Wellington’s victories! – the question is, how am I to get over this infernal woman!”（3.4.8）これは、上で述べてきたような共同体意識を逆手に取り、Prince Regentが国家の一大事に自らの欲望を優先させてしまっているというその狭量な了見を皮肉った表現ととれる。

J.O.Bailey が “England is the victor in the war with Napoleon, and in the larger allegory England stands（along with the Spirit of the Pities）for mankind. The English leaders are not without their faults, but in general they oppose to Napoleon’s lust for power their unselfish love of country.”（211-2）と分析するように、イングランドの指導者たちは“country”への“unselfish love”を持ち、“country”のために戦っている。ここで注目したいのが、ベイリーが “English leaders”とその範囲を限定していることである。たとえ戦場から離れた所にいても国家の危機を自らの危機であるかのように切迫したものとして想像し感じることができる指導者たちと、あくまでも自らに危害を加える相手を敵と認識する“dull peoples”の二者、換言すれば “recorded history”の側にいる者たちと “unreckoned, unheedeed superfluity”の側にいる者の対立構造はやはり強固に存在するのである。

ナポレオン及びフランスの場合はどのように描かれているだろうか。そもそもナポレオンの半島戦争やイングランドへの侵略を企てた戦いの動機には議論の余地がある。ハーディが参照したとされる歴史書 *Napoleon and England: 1803-13* においては、アミアンの条約の破棄について、“Napoleon is looked on as entirely immersed during the years 1801-1803 in beneficent schemes for securing the harmony of all classes in France and in founding anew the greatness of that nation by sagacious reforms at home and by the adoption of a spirited colonial policy.”（xv）という説があることが紹介されるが、作者 P.Coquelleは “He wished to be proclaimed Emperor. Having risen through war, he considered that

war alone could raise him to the first rank.”（272）と結論づける。

作中で確かにナポレオンは、自身が人民を古いくびきから解放する役目を負っていると公言する。

> I cut the knot
> Of all Pitt’s coalitions; setting free
> From bondage to a cold manorial caste
> A people who await it. (1.2.3)

> Soldiers, I come with these few faithful ones
> To save you from the Bourbons, — treasons, tricks,
> Ancient abuses, feudal tyranny —
> From which I once of old delivered you.
> The Bourbon throne is illegitimate
> Because not founded on the nation’s will,
> But propped up for the profit of a few.
> Comrades, is this not so? (3.5.4)

しかし一方でナポレオンは以下のようなことも述べる。

> My brain has only one wish – to succeed! (1.3.1)

> Hence we, . . . As comrades can conjunctly rule the world
> To its own gain and our eternal fame! (2.1.8)

> Well, war’s my trade; and whencesoever springs
> This one in hand, they’ll label it with my name! (3.1.1)

これらの発言における “eternal fame”、“label it with my name” という表現には、先に述べたように、ナポレオンが個人的な名声欲のために recorded history の一員となることを志向していることが示されている。

ナポレオンの真意が個人の名声欲か人民の解放という大義のどちらにあるのかについては、本作でナポレオンがImmanent Willの影響下にあることが示されることを考慮に入れる必要があろう。この問題はしばしば研究者たちを

困惑させてきた。オレルは次のように述べている。

> if Napoleon were to be denied free will in any significant sense, Hardy would have to provide a credible alternative, a reason for acting that would hold a reader’s interest more than a drugged compulsion. This problem, which Hardy perhaps never satisfactorily solved, involved the relationship between an individual’s belief that he controlled his destiny and the deterministic conviction of the later Victorian era that effects moved sluggishly but determinedly from specific, if badly understood, causes. (47)

そして、このImmanent Willの存在により、ナポレオンの名声欲はWillの働きに帰因するものであるかのように描かれる。“As servant of the Will, Napoleon is subject to Its reasonless and insatiable hungers, chiefly lust for power and command. Whatever dream the historical Napoleon may have had for Europe ultimately unified, ordered for men’s good, and at peace, the Napoleon of *The Dynasts* has no such dream except as a means to his own fame.”（Bailey 188）つまり、ナポレオンの場合は、個人の存在、利益、共同体の利益、そして国家よりもImmanent Will が優先されるのである。ナポレオンは作中の登場人物の中で唯一、個人でありながら国家でもあるという、その二者を一身に体現する存在である。個人と国家が並置されつつ、その両者の上位に Immanent Will が置かれているという作品の構造に鑑みると、個人でもあり国家でもあるナポレオンの上位にいるのは Will のみである。ゆえに、ナポレオンがWillの “servant” であり、その意志に “subject” であるさまが描かれるのは必然であろう。すなわち、*The Dynasts* において描かれる個人あるいは “primordial village”と国家の葛藤は、名もなき人々においては前者の、歴史上の人物、特にイングランドの人物たちにおいては後者の優先という形で解消されるが、その両者が分かちがたく結びついているナポレオンにおいては、どちらが優先するでもなく、Immanent Willが前景化するという形でその対立が解消されるのである。

Notes

[1] nationalismとpatriotismの違いについて、Liah Greenfeldは*Encyclopedia of Nationalism*の中で、nationalismが“an umbrella term under which are subsumed the related phenomena of national identity（or nationality）and consciousness, as well as collectivities to which they correspond – nations.”であり、狭義では“national consciousness”と同意であるとし、patriotismを“the concept denotes ‘love of country,’ *partia* – the land of one’s fathers – and is a natural sentiment that is likely to exist whether or not one’s community is defined as a nation.”（255）と説明している。またSteven Grosbyはpatriotismの定義を“attachments of loyalty to a territorial community”と考えることを提案し、nationalismを “When one divides the world into two irreconcilable and warring camps – one’s one nation in opposition to all other nations – where the latter are viewed as one’s implacable enemies, then, in contrast to patriotism, there is the ideology of *nationalism*.”（16-7）と定義づけている。

[2] Sergeant Youngは役名が示す通り名が与えられているが、作者により“Thomas Young for Sturminster-Newton; served twenty-one years in the Fifteenth（King’s）Hussars; died 1853; fought at Vitoria, Toulouse, and Waterloo.”という注がわざわざつけられていることからも明らかなように注を必要としないネルソンやピットと同様の歴史上の人物とは言いがたい。

Bibliography

Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 1983. London: Verso, 2006.

Bailey, J.O. *Thomas Hardy and the Cosmic Mind: A New Reading of* The Dynasts. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1956.

Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. New Haven: Yale U. P., 1994.

Coquelle, P. *Napoleon and England 1803-1813: A Study from Unprinted Documents*. Trans. Gordon Danielle Know, John Holland. London: George Bell and Sons, 1904.

Dean, Susan. *Hardy’s Poetic Vision in* The Dynasts: *The Diorama of a Dream*. Princeton, NJ: Princeton U.P., 1977.

Franklin, Alexandra, Mark Philip. *Napoleon and the Invasion of Britain*. Oxford: Bodleian Library, Oxford U.P., 2003.

Greenfeld, Liah. “Etymology, Definitions, Types.” *Encyclopedia of Nationalism*. Ed. Alexander J. Motyl. 2 vols. San Diego: Academic Press, 2001. 251-65.

Grosby, Steven. *Nationalism: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford U. P., 2005.

Hardy, Thomas. *The Dynasts: An Epic-Drama of the War with Napoleon*. Ed. Harold Orel. London: Macmillan, 1978.

—. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Ed. Michael Millgate, London: Macmillan, 1984,

—. *The Return of the Native*. 1878. London: Penguin, 1999.

—. *The Trumpet Major: John Loveday A Soldier in the War with Buonaparte and Robert his Brother First Mate in the Merchant Service, A Tale*. 1880. London: Macmillan, 1974.

—. *Thomas Hardy: The Complete Poems*. Ed. James Gibson. Basingstoke: Palgrave, 2001.

Lukács, Georg. *The Historical Novel*. Trans. Hannah and Stanley Mitchell. London: Merlin P, 1969.

Orel, Harold. *Thomas Hardy's Epic-Drama: A Study of* The Dynasts. Lawrence: U of Kansas P, 1963.

Wickens, G. Glen. *Thomas Hardy, Monism, and the Carnival Tradition: The One and the Many in* The Dynasts. Toronto: U of Toronto P, 2002.

Wright, Walter F. *The Shaping of* The Dynasts: *A Study in Thomas Hardy*. Lincoln: U of Nebraska P, 1968.